資料６

# 「古典の日」に関する取組について

平成２６年１月２３日
広域観光・文化振興局

このたび、「古典の日」に関する取組の一環として、文化庁 平成２５年度文化芸術振興費補助金（地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ）を活用した「古典の日啓発リーフレット」を作成しましたので、下記のとおりご報告します。

２月１日（土）に国立文楽劇場（大阪）で開催する「関西元気文化圏推進フォーラム／古典の日フォーラム in 関西」（広域連合、古典の日推進委員会、関西元気文化圏推進協議会の三者共催）において配布するとともに、今後とも、「古典の日」の普及・啓発に活用してまいります。

記

１　事　業　名　　「古典の日啓発リーフレット」作成事業

２　企画・発行　　関西広域連合

３　事 業 内 容　　各構成府県市にゆかりのある方々から「古典と私」をテーマにメッセージをいただき、リーフレットとしてまとめて発信することにより「古典の日」を広く普及・啓発していく。

４　印 刷 部 数　　２万部

５　配　布　先　　各構成府県市を通じ、府県市情報コーナー、古典関係イベント等が開催されるホールや劇場、図書館等にて配布・活用

# 11月1日は「古典の日」

## 関西にゆかりのある方々からのメッセージ

### 木村 至宏氏【文化史家、成安造形大学付属近江学研究所長】

**琵琶湖が古典の一分野を構築**

いつも日本最大の湖「琵琶湖」を目にしながら、日々を送っています。自然が形象した湖でありますが、奈良時代の最古の歌集「万葉集」に至って、多くの歌人によって秀でた歌が詠まれ、湖により親近感をもつようになったことを憶えています。

これに続いて、湖にちなんだ詩歌集をはじめ著名な物語・随筆・紀行文などが刊行されました。いずれも湖が、その時代に生きた歌人や作者の心情に、湖を介してみごとに深く投影されているように思います。

その意味からいいますと、琵琶湖は古典の一分野を育んだ源ではないかとさえ思っています。湖のもつ優れた風光に接するたびに、古典の一つを思い浮かべ、その時代のうつろいに思いをはせることが楽しみの一つとなっています。

古典が、どの時代に書かれた書物であっても、いまを生きる私たちにとっては重要な存在です。

### 金剛 永謹氏【能楽金剛流宗家】

**古典…こころここに**

能には源氏物語や平家物語、伊勢物語などの古典を題材にした演目が数多くあり、京都をはじめ関西圏にはその舞台となる場所が至る所に存在します。

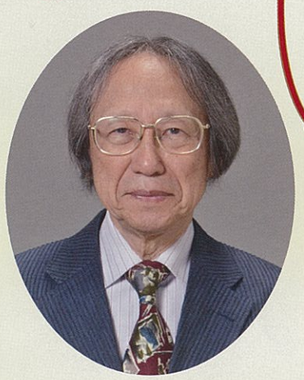
京の町を歩いていると、目前の光景と能の名場面がふと重なり、思わず当時の風景を想像しては、しばし足を止めて眺め入ってしまいます。

能の詞章は、現代の若い世代の人達には分かりにくい部分もあるかもしれませんが、和歌など日本の美しい言葉の数々が随所に散りばめられ、言葉の錦織ともいわれています。この能の詞章の醍醐味をぜひ味わってもらいたいと願っています。

先人達の卓越した美意識と叡智に富み、自然との調和の中で育まれた古典は、私達の傍らにいつも在る心の拠り所のようなものだと思います。それは宇宙的なものによって生かされているという人間としての分を知った謙虚な思いにも繋がります。

古典の日制定を契機にして、様々な古典に触れ合うことにより、その心が後世に引き継がれていきますことを願っています。

### 中西 進氏【一般社団法人 日本学基金理事長】



**古典と現代**

わたしが古典をよんで驚くことの一つに、古典の恐るべき現代性がある。

たとえば旧暦五月に降る雨のことを「さみだれ」という。五月のことを「さつき」というから五月の雨を「さみだれ」というのだと皆きめてかかっているが、これを言語学的に解説することはむずかしい。ところが神聖な物に「さ」をつけてよぶことは古典の常道だし、「みだれ」が「乱れ」であることはいうまでもない。つまり五月に降りつづく陰うつな雨は恐るべき心の錯乱者だったと、古語は語るのである。それは梅雨がもつ憂うつさに他ならず、現代人の心理とまったくひとしいものを内包する。

この古典の、時代をこえた視点をわたしたちはもっともっと真剣に聞きとるべきだろう。古典は語られた時々には現代文学だったことも、忘れがちなことではないか。

## 古典の日に関する法律（平成二十四年九月五日 法律第八十一号）

（目的）

第一条　この法律は、古典が、我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、古典の日を設けること等により、様々な場において、国民が古典に親しむことを促し、その心のよりどころとして古典を広く根づかせ、もって心豊かな国民生活及び文化的で活力ある社会の実現に寄与することを目的とする。

（定義）

第二条　この法律において「古典」とは、文学、音楽、美術、演劇、伝統芸能、演芸、生活文化その他の文化芸術、学術又は思想の分野における古来の文化的所産であって、我が国において創造され、又は継承され、国民に多くの恵沢をもたらすものとして、優れた価値を有すると認められるに至ったものをいう。

（古典の日）

第三条　国民の間に広く古典についての関心と理解を深めるようにするため、古典の日を設ける。

2　古典の日は、十一月一日とする。

3　国及び地方公共団体は、古典の日には、その趣旨にふさわしい行事が実施されるよう努めるものとする。

4　国及び地方公共団体は、前項に規定するもののほか、家庭、学校、職場、地域その他の様々な場において、国民が古典に親しむことができるよう、古典に関する学習及び古典を活用した教育の機会の整備、古典に関する調査研究の推進及びその成果の普及その他の必要な施策を講ずるよう努めるものとする。

附　則

この法律は、公布の日から施行する。

## 「古典の日」宣言

『源氏物語』は、日本の古典であり、世界の古典である。

一千年前、山紫水明の平安の都（みやこ）に生まれたこの作品は、文学はもとより美術、工藝、またさまざまの藝能に深い影響を及ぼし、日本人の美意識の絶えることのない源泉となってきた。一九三〇年代に英訳されて以来、近年では二十余の外国語に翻訳されて、世界各地の人々に愛読され、感銘を与えている。

この物語について、『紫式部日記』に記された日から数えて一千年。この源氏物語千年紀を言祝（ことほ）いで、私たちは、今後十一月一日を「古典の日」と呼ぼう。

古典とは何か。

風土と歴史に根ざしながら、時と所をこえてひろく享受されるもの。人間の叡智の結晶であり、人間性洞察の力とその表現の美しさによって、私たちの想いを深くし、心を豊かにしてくれるもの。いまも私たちの魂をゆさぶり、「人間とは何か、生きるとは何か」との永遠の問いに立ち返らせてくれるもの。それが古典である。

揺れ動く世界のうちにあるからこそ、私たちは、いま古典を学び、これをしっかりと心に抱（いだ）き、これを私たちのよりどころとして、世界の人々とさらに深く心を通わせよう。

そのための新たな一歩を踏みだすことを、源氏物語千年紀にあたって、私たちはここに決意する。

紫のゆかり、ふたたび。

平成二十年（二〇〇八年）十一月一日

源氏物語千年紀よびかけ人
源氏物語千年紀委員会

時空を超えた人間の叡智の結晶 ―古典。
「古典の日」は源氏物語千年紀を記念して2008年11月1日に京都で宣言され、11月1日が「古典の日」として、国会で法律として制定されました。


**企画・発行**
関西広域連合広域観光・文化振興局文化課
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入る 京都府文化政策課内
TEL 075-414-4239　FAX 075-414-4223
Eメール bunsei@pref.kyoto.lg.jp

文化庁平成 25 年度 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

## 加藤 隆久氏【生田神社宮司】

### 古典と私 ―稽古照今―

私はこれまで、多くの古典に目を通して来た。そこから学んだものは、その時代の鏡である自然観・人生観・世界観・宗教観・生活観や社会情勢であり、古典に込められた「喜・怒・哀・楽」の心の襞である。それと共に古典に記され又語られた日本の言語である。

今、環境破壊、自然破壊と共に言語破壊により、日本の古きよき言語が忘れ去られようとしている。古来、「言霊の幸はう国」と言われて来た。言葉には魂が宿り、良き言葉を使うと良き事がおこり、悪しき言葉を使うと悪しき事がおこると信じられて来た。

我国にはうるわしく、よろしき言葉があり、さまざまな秀れた言語で綴られた古典を読んで教えられる事が多かった。

日本の古典の最も古い「古事記」の序文の中に「稽古照今」という言葉が記されている。この言葉は、昔の事を参考にして今日の在り方を考える。経験を通して反省の質とする。人生はそうしたものであるという。

今、古典を学ぶことによって、現代の社会生活・行動規範を反省し、よりよき人生を送る指針としてほしいのである。

## 村瀬 憲夫氏【近畿大学名誉教授】

### 「古典の日」は「地域の日」

「古典の日」は、古典の良さを知り、古典の持つ力を現代に活かし、そして未来へ継承していこうとする記念の日であるとするならば、この日はまた「地域の日」でもあります。

と申しますのは、古典は、その土地の風土を足場にして生まれている場合が多いからです。例えば『万葉集』に詠まれました「若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺を指して鶴鳴きわたる」(山部赤人)は、和歌山県の「和歌の浦」の風土の中で歌われました。

今から1300年も昔に、万葉びとが訪れ、その風景を愛でて歌に詠み、そしてその後も松尾芭蕉、夏目漱石を始めとして、実に多くの人々が訪れた、まさにこの地に住んでいることに思いをいたします時、この地への愛着の気持ちが一層高まってきます。

そしてそれを子供たちにも体験してもらいましょう。そうすれば、子供たちは「わが町」に愛着をもち、将来必ずや、この地の活性化に一役も二役もかってくれることでしょう。

「古典の日」、それは「地域が将来に活き活きと伸びていく記念(祈念)の日」でもあります。

## 中島 諒人氏【演出家、鳥の劇場芸術監督】

### 現代をとらえるための道具として

「古典」。今生きていない作家によるもので、数十年以上の時を超えて評価の定まった作品というくらいに、それを定義するなら、私は古典ばかり演出している。イギリスのノーベル賞受賞作家ピンターの「料理昇降機」、スイスのデュレンマットの「天使バビロンに来たる」、アメリカのアーサー・ミラーの「セールスマンの死」、魯迅の「剣を鍛える話」、三島由紀夫の「葵上」など。

いい作品は時代を経るにつれて新しくなる、とはよく言われること。我々は古い作品を、懐古趣味や教養のためにやるのではない。優れた作家が見抜いた人間や社会の問題は、現在でも、むしろ現代において一層先鋭化して現れる。

「料理昇降機」、「セールスマンの死」は大企業や資本の暴力性を、「天使バビロンに来たる」や「剣を鍛える話」は高揚した大衆のエネルギーや愚かさを強烈に浮かび上がらせる。

「今だけ、金だけ、自分だけ」のグローバル社会を捉えるために、「古典」は極めて有効な道具だ。

## 瀬戸内 寂聴氏【作家】

### 世界に誇ろう日本の古典文化

小学校の学芸会で、私は「因幡の白兎」になって、大国主命に助けられました。その話がわが国の古典の元祖「古事記」によるものなど知りませんでした。もっと幼い頃絵本で見た竹取物語のかぐや姫の話が美しくあわれで心にしみついていました。この話も、源氏物語よりも以前に生れた日本の古物語(ふるものがたり)といわれる古典文学とは知りませんでした。源氏物語は十三歳で入学したばかりの女学校の図書館で与謝野晶子現代語訳を読み、その面白さに圧倒されました。それ以来、どれだけ多くの古典によって心をうるおされ、育てられたことでしょう。まさか将来自分が小説家になって、源氏物語の現代語訳を果すなど夢にも思っていませんでした。

考えてみれば文学のみならず、芸能、音楽なども日本の古典は豊かでまぶしく世界に誇るものばかりにあふれています。昨年十一月一日を「古典の日」と、国に定められたことは有難くめでたいことでした。若い人も、子供たちも、この日こそ、古典に触れ、世界に向って自国の文化の豊かさに胸を張ってほしいと願います。

## 村井 康彦氏【国際日本文化研究センター名誉教授】

### 「古典の日」のこれから

源氏物語千年紀事業の盛り上りのなかから生み出された、11月1日の「古典の日」。その特徴は「古典」の概念を古典文学だけでなく、美術、演劇、伝統芸能、演芸、生活文化などひろくとらえた点にある。源氏千年紀のイメージにとらわれず、広汎で多様な事業展開が望まれる。

ただし「古典の日」は祝日ではない。しかも二日後には祝日の「文化の日」が控えている。両者の差別化を図るか、それとも一体化を試みるか、これも今後の課題であろう。あるいは11月1日に限定せず、「古典の日・関連」との文字を冠して催すことがあってもよいと思う。

しかしもっと重要なことは、事業を京都や東京など都市部でのイベントで終始するのではなく、各地にひろげることにある。そのためには地方自治体や学校教育との連繋が必要となろう。

始まったばかりの「古典の日」事業。課題の多さはそのまま将来への期待の大きさにつながるものと考える。

## 竹本 住大夫氏【文楽太夫、人間国宝】

### 古典と私

人形浄瑠璃文楽は、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術です。

今や伝統芸能という枠で紹介される文楽ですが、成り立ちは江戸時代初期にさかのぼります。

竹本義太夫の義太夫節と近松門左衛門の作品により、人形浄瑠璃文楽は大人気を得て全盛期を迎え、竹本座が創設されました。このあと、豊竹座をはじめいくつかの人形浄瑠璃座が盛衰を繰り返し、幕末、淡路の植村文楽軒が大阪ではじめた一座が中心的な存在となり、やがて「文楽」が人形浄瑠璃の代名詞となり今日に至っています。

さて私は、「人形浄瑠璃文楽」の太夫を67年間務めさせていただいております。

いろいろな試練もありましたが、88歳の今も舞台で浄瑠璃を語ることができますことは、ひとえに支えていただいた皆様の、励ましやご声援のおかげと心より感謝いたしております。

先達から脈々と受け継がれてまいりました文楽を、絶やすことなく後世に伝えていくのが私の使命だと思い、これからも日々精進いたす覚悟でございます。

今後とも「人形浄瑠璃文楽」に変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

## 今井 雅子氏【脚本家、堺親善大使】

### 古文は恋文

高校生の頃、同級生たちが解読に手を焼いていた古文を、私は現代文を読むようにするすると読めた。外国語を話す人とも「同じ人間なんやからわかりあえる」と思っていたから、「同じ日本人が書いたもんなら、もっとわかる」のだった。

時を超えて届いた手紙のように、古文を読んだ。顔も知らないペンフレンドたちは、現代とはまるで違う生活の中で、春の訪れを喜び、花を愛で、恋にときめいた。そんな「おなじ、おなじ」「わかる、わかる」を見つけるのが楽しかった。

私が脚本に参加しているNHK Eテレの長寿アニメ「おじゃる丸」の主人公おじゃる丸は、千年前のヘイアンチョウという妖精世界からやって来たという設定。2013年秋放送の作品で、ヘイアンチョウから届いた恋文をおじゃる丸が拾い、文通が始まる話を書いた。

千年の時に隔てられても同じ月を見ている、おじゃる丸と「恋文の君」。私が「古文の君」たちに抱いている思慕を物語に込めた。

## 牛丸 好一氏【書家、兵庫県書作家協会 参事】

### 古典と私

書家にとり最高の古典といえば王羲之の作品を指す。その王羲之の存在を際立たせる作品が日本にある。奈良時代の光明皇后の楽毅論で、日本の楷書作品中最高のものとして評価されている。

この作品からは日本の書道の原点を見ることが出来る。光明皇后の楽毅論は中国にある王羲之楽毅論のどの臨書よりも古い臨書で王羲之研究には欠かせない古典である。

第一回の遣唐使が渡ったのは唐の太宗の治世、第二回、第三回は高宗。第十回は玄宗の治世で日本の天皇は聖武天皇だった。遣唐使の船で留学した学問僧は数多くの王羲之の書(双こう)を持ち帰った。それらは天皇の手に入る。その中に王羲之の楷書の名品、楽毅論があった。聖武天皇はそれを光明皇后に渡す。皇后はそれを臨書して天皇に献上した。それが現存する光明皇后臨楽毅論である。

この古典からは東晋の王羲之、唐の太宗、遣唐使、聖武天皇、光明皇后、正倉院と、中国と日本の文化の深い関係を感じる。書の古典は作品が優れているとともに背景に大きな時代の流れと歴史を持っている。